

早稲田社会学会ニュース 第49号

2017年4月28日発行

早稲田社会学会事務局

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部 社会学研究室内

Tel: 03-5286-3742

E-mail: socio-office@list.waseda.jp

URL: <http://www.waseda.jp/assoc-wss/>

今回のニュースの内容

1. 第69回早稲田社会学会大会および総会開催のお知らせ
2. 本年度大会シンポジウムについて
3. 大会一般報告および『社会学年誌』第59号投稿の募集
4. 2017年度研究助成の募集
5. 第39回研究例会開催のお知らせ
6. 入退会者のお知らせ
7. 学会費納入のお願い

1. 第69回早稲田社会学会大会および総会開催のお知らせ

本年度の早稲田社会学会大会および総会が、2017年7月8日(土)に、早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス33号館3階第1会議室）において開催されます。シンポジウムのテーマは「『人文・社会科学の危機』を考える」です。詳細につきましては次項「本年度大会シンポジウムについて」をご参照ください。一般報告などを含むプログラムの詳細につきましては、学会HP上にてお知らせする予定です。

事務局では大会での一般報告を募集いたします。報告を希望される方は、第2頁をご参照のうえ、事務局までお申込みください。

2. 本年度大会シンポジウムについて

テーマ：「人文・社会科学の危機」を考える

報告者：田中千津子（学文社）「苦境に立つ学術専門書の飛躍を思う——編集者の現場からの視点」

太郎丸博（京都大学）「科学の政治化と社会学の『危機』」

松本三和夫（東京大学）「学術と社会の境界面で想起すべきこと——科学社会学者の視点」（仮）

討論者：那須壽（早稲田大学）・山田真茂留（早稲田大学）

司会者：大黒屋貴稔（聖カタリナ大学）・関水徹平（立正大学）

<趣旨説明>

近年、「人文・社会科学の危機」がしばしば指摘されている。文部科学省が2015年6月に各国立大学に出した、人文・社会科学系学部などの廃止や他分野への転換を求める「通知」は記憶に新しいところであろう。この「危機」は、国家の研究・教育政策の変化（公共部門の運営効率化を目指す、いわゆる New Public Management

の導入) と関係づけて論じられたり、「アカデミック・キャピタリズム」と呼ばれる、外部資金獲得に向けた市場的競争に大学が巻き込まれる、あるいは積極的に関与する事態(大学の企業化)として指摘されたりもする。こうした変化は、人文・社会科学知の産出も自律的な営みではありえず、産業界からの要請や「社会的有用性」という要請に応答する営みという性格をますます強めていることを示しているかもしれない。

「人文・社会科学の危機」とは一体いかなる事態を指しているのか。そして、そのような「危機」を産み出す社会的な背景・文脈とはいかなるものであるのか。本年度の早稲田社会学会シンポジウムでは、「危機」として語られる人文・社会科学内外の変容を主題とし、こうした変容の実態とそれを産み出す社会的な背景・文脈とを、社会学的な視点からより明確に認識することを目指す。

報告者には、科学社会学の立場から自然科学・科学技術と社会の関係を問い、近年は社会学研究のあり方についても考察されている松本三和夫氏(東京大学)、日本の社会学研究のあり方について実証的研究を積み重ねてこられた太郎丸博氏(京都大学)、学術出版の現場で人文・社会科学知の生産に携わり、学術コミュニケーションのあり方を長年見てこられた田中千津子氏(学文社)の御三方をお招きする。

コメンテーターには、知の社会学の観点から文部科学省の大学政策を検討してきた那須壽氏(早稲田大学)、学術出版のフィールドワークから人文・社会学知のあり方を考究されてきた山田真茂留氏(早稲田大学)をお迎えする。

(聖カタリナ大学 大黒屋貴稔・立正大学 関水徹平)

3. 大会一般報告および『社会学年誌』第59号投稿の募集

報告および投稿を申し込む方は、以下の項目をA4の用紙1枚に記入し、事務局宛て郵送またはE-mailにてお送りください。報告と投稿の両方に申し込む場合には、それぞれ別の用紙で申し込みをお願いいたします。

大会一般報告、または『社会学年誌』第59号投稿、のいずれかを明記してください

- (1) 氏名
- (2) 所属
- (3) 郵便番号、住所、電話番号、FAX番号、E-mailアドレス
- (4) 題目(副題を別として25字程度まで)
- (5) 内容概略(200~400字程度)

大会報告：申し込み締め切りは、5月15日(消印有効)です。

『社会学年誌』投稿：申し込み締め切りは、6月30日(消印有効)です。

『社会学年誌』原稿の提出締め切りは、8月末日(消印有効、郵送のみ受付)です。申込書提出後の題目、内容の大幅な変更は認められませんのでご注意ください。また、申込後に投稿を辞退なさる場合は、8月15日までにその旨を必ずご連絡ください。なお、分量、書式その他、投稿規定については、『社会学年誌』の最新号(第58号)をご参照ください。

現在早稲田社会学会会員でない方で報告もしくは投稿をご希望の方は、上記の申込書とあわせて入会申込書をお送りください。入会申込の手続きまたは申込書の入手方法につきましては、学会HPの「入会案内」をご覧ください。事務局までお問い合わせください。

4. 2017年度研究助成の募集

これまでに当学会に寄せられた寄付金により、寄付者のご意思を尊重して、次の要項により会員各位の研究活動を助成いたします。

助成対象：早稲田社会学会の発展に寄与する研究活動
助成額： 1件 30万円程度を上限とする

助成を希望される方は事務局までご連絡ください。追って「申請書用紙」をお送りいたします。申請書の提出締め切りは、5月15日（消印有効、郵送のみ受付）です。なお、「早稲田社会学会研究助成取り扱い要領」の規定により、「助成の直前の年度まで継続して2年以上の会員歴がある」方が対象となります。また、研究助成を受けられた方には、学会大会一般報告（または学会誌投稿）により、その成果を報告していただくようお願いいたします。また、この趣旨に賛同される方からのご寄付も募っております。寄付については事務局までお問い合わせください。

5. 第39回研究例会開催のお知らせ

第39回研究例会が下記の要領で開催されます。多数のご参加をお待ちしております（以下敬称略）。

テーマ：「戦後日本社会学知の変容を考える」

日時：2017年5月20日（土）14時30分～17時30分

会場：早稲田大学文学部（戸山キャンパス）39号館5階第5会議室

報告者：片上平二郎（立教大学兼任講師）、齋藤圭介（岡山大学）、関水徹平（立正大学）

司会者：大黒屋貴稔（聖カタリナ大学）・関水徹平（立正大学）

第一報告：齋藤圭介（岡山大学）

「戦後日本の社会学者の専攻分野の重複と差異——多次元尺度構成法を用いた時系列変化に着目をして」

同じ専攻分野の社会学者であったとしてもその問題関心が異なることは、日常的に目にする機会がある。たとえば、家族社会学者であっても、同時に社会変動論や人口問題に関心をもつ者もいるだろうし、あるいは教育や社会福祉により関心をもつ者もいるだろう。そして、そうした問題関心の〈近さ〉や〈遠さ〉は、社会背景や研究関心の流行などによっても異なることが予想できる。日本社会学会が会員に公刊している学会名簿には、この問題関心の〈近さ〉や〈遠さ〉を考察するのに最適な情報が記載されている——学会に入会を希望する会員は、32の専攻分野から3つまでを選び申請することになっている。

本報告は、1970年前半から2010年代半ばまでの、社会学者の問題関心の重複と差異を、名簿上の専攻分野情報をもとに多次元尺度構成法（MDS）を用いて視覚化したうえで、時系列の変化に着目をして考察していく。

第二報告：関水徹平（立正大学）

「社会学知における当事者経験の位置」

戦後日本の社会学は、当事者経験をどのように位置づけてきたのだろうか。そもそもマックス・ウェーバーは、社会学に行為の（客観的）因果解明と行為者の（主観的）意味理解という二つの柱があるという見解を示していた。社会学的調査・研究の多くは、ウェーバーのいう二つの柱を軸に展開されてきたといえるだろう。後者、行為者の意味理解について、アルフレッド・シュッツは現象学的知見から、社会学知にとっての当事者経験の根源的位置を明らかにしている。近年では、ナラティブに着目し、当事者経験の解明に主眼をおく調査・

研究方法をとる社会学者も多い。

本報告は、社会学における当事者経験の位置づけを整理しつつ、それを①社会学知に内在的な変化（調査・研究手法の展開）、②社会学知と社会との関係の変容（調査・研究の社会的・倫理的責任への関心の高まり、研究成果の社会的還元への要請の増大など）という2つの視角から検討し、社会学知における当事者経験の位置づけの変化を考察する。

第三報告：片上平二郎（立教大学）

『実証的なもの』と『教養的なもの』との間で——批評的な社会理論のゆくえ

アドルノは1966年の講演で、自身が執筆した事典の「社会」項目が“知識人的”であると批判されたことを述べている。過去の思想的伝統を多分にふまえた彼の文章は、「実証主義」的な社会学の見地からは、過度に「教養主義」的なものであると受け取られたのだ。しかし、他方でアドルノは、単純に「実証主義」を批判しているわけではなく、ドイツの人文科学におけるロマン主義的風土に対する相対化の視座をもたらすものとして「実証主義」の有効性を指摘している。今回の報告では、まず、この「教養主義」と「実証主義」の間で、アドルノのcritical theoryが持つ「批評的=critical」な性格について考えてみたい。アドルノの学的態度は、社会学と哲学と文化批評を独特なかたちで織り交ぜたかたちで展開されるものである。

そして、このようにアドルノの学的態度から抽出された「批評的な社会理論」という要素を軸にして、1970年代以降の日本社会学に見られるようになった「現代思想」や「文芸批評」、「ポストモダニズム」と接続する動きが持っていた意味と、現在の在り様について考察してみたい。

6. 入退会者のお知らせ

理事会において次の方の入会が承認されました。（以下敬称略）

2016年12月24日理事会	石倉義博(早稲田大学理工学術院創造理工学部社会文化領域・教授)
2016年12月24日理事会	本多真隆(早稲田大学人間科学学術院・助手)

理事会において次の方の退会が承認されました。（以下敬称略）

2016年12月24日理事会	南山 正義
----------------	-------

7. 学会費納入のお願い

今年度の学会費を、同封の「郵便振替払込書」にてお振り込みくださいますようお願い申し上げます（今年度分をすでに納入されている方および名誉会員の方宛てには、払込書は同封していません）。

年会費： 一般会員 5,000円 学生会員 3,000円

口座番号： 00100-3-38020

加入者名： 早稲田社会学会

■学会費の納入にご理解とご協力をお願いいたします！

近年、学会費納入率が低下しており、学会運営に支障をきたしております。会員の皆様には、引き続き、早稲田社会学会活動にご理解いただき、会費を納入いただけますようお願いいたします。

以上